

2016年3月に行ったこのインタビューでは、美術家である藤浩志が十和田市現代美術館館長という立場を得た際にどのような場を作り社会に開いたのか、そこで人々の居場所や関わり方をどのように作ったのかに焦点を当てるとともに、そこから見ている未来像についても尋ねた。

木村：藤さんは、美術家であると同時に十和田市現代美術館の館長でもあります<sup>1)</sup>。今回はその立場から美術館と地域、まちなかの関係の理想像をどう考えていらっしゃるのかをお伺いします。あわせて藤さん自身についての現在とこれからについてのお考えもお尋ねします。まず、十和田では館長として、地域との関係づくりについてどのような取り組みをされていますか？

藤：ずっとシステムづくりを模索している状態で、この3年間で少しずつ変化しつつあります。最近の事例としては2015年の4月より十和田市現代美術館パートナーズ(TAPS)という新しいサポーターのフレームができました。これはミュージアム友の会の発展形で、教育普及的なアウトリーチ活動に特化した予算を確保するために組んだものです。以前は美術館の事業費として教育普及の予算は少しかつたのですが、アウトリーチの予算が組み込まれていませんでした。ですから作家のプロジェクトの一端として展覧会費の中から予算を割いてアウトリーチを行っていたり、僕が個人的な関係で学校の先生から頼まれて作品作りの技術指導をしたり、「NHK高校講座」という番組の企画で高校に行き、地元の高校の美術部の学生に授業をしたりして何か機会があるごとに地元との関係を作ろうとしていました。

しかし、TAPSのおかげでバスを手配して、小学校にプログラムを持っていったり、逆に小学生を美術館に呼んだり、継続的なアウトリーチの活動もできるようになったと思います。

木村：藤さんが入ることで、スタッフと地域の方やスタッフ間での向きあい方が変わるような部

分はありましたか？

藤：僕が現場に入るまでは管理運営は十和田市が直営で行っていました。ですから市役所の職員が館長として赴任し、その補佐や経理担当など市役所から出向して来ていました。専門職として学芸員が一人と広報兼テクニカルスタッフが一人常勤で、あと非常勤職員が一人という小さなところでした。受付・監視などは外部の人材派遣に依頼して行っていたようです。しかし、美術館を計画した当初からN&A(NANJO and ASSOCIATES)という東京の会社がコンサルタントとして関わっていて、そこが常設作品などもディレクションし、開館後も年に2つの企画展についてはそこが常設作品の作家を中心として展覧会を構成していました。美術館の開館当初はまちの人が美術館の活動のサポートを行う団体を作ってまちなかのプロジェクトを行ったりしていたようですが、僕が赴任した時にはその団体の活動がほとんどなくなってしまいました。美術館で何かを仕掛けるということではなく、市民の任意団体がまちでの活動をしかけるストーリーを作りいろいろ動いていたのですが、その活動の中心にいた人が活動を離れたたり紆余曲折あり、市としては次の展開を作りたいと思っていて、そのあたりを指定管理として入った僕らに期待していたところもあります。

十和田市現代美術館そのものが中心市街地の活性化を目指して作られた経緯もありますが、中心市街地、特に徒歩5分のところにある商店街との関係をどのように作っていくのかは美術館としても課題で、いろいろ模索してきました。韓国の作家、チェ・ジェンファの個展の時にかなりガッツリ商店街を展示会場としたことがきっかけとなり、それなりにまちの人の期待はありました。僕らが赴任する時に、市が置き土産的に緊急雇用の費用を使って一年間限定で美術館にまちへの案内を行うコンシェルジュを募集することになっていました。美術館の最初の仕事はその採用面接を行うことだった

ことを覚えています。コンシェルジュ2名と美術館の受付監視スタッフ2名の雇用は美術館のまちでの役割をいろいろ変えていく上でとても重要だったと思います。

木村：コンシェルジュは委託スタッフですか？役割についても教えてください。

藤：当初は緊急雇用の1年限定の直接雇用でしたが、結局それから3年経った現在でもN&Aの直接雇用の契約スタッフとして活動してもらっています。美術館の作品案内とかではなく、まちなかとか周辺施設への観光対応のコンシェルジュなんです。当時「交通が不便だからどう行けばいいか」とか「この周辺で食事できるところはないか」という問い合にわせに対して情報が整備されてなくて、受付やスタッフなどまちを知らない人が対応しなければなりません。もともと役場の人が美術館スタッフだったので、まちのことは知っているという自負があり積極的に知ろうとする活動はしなくても良かったのかもしれませんが。面接で初めて出会い、そのまま採用した二人のスタッフですが、一人が以前居酒屋の店長をしていた経歴で、人と接することやまちのレストランやお店にもかなり興味を注いでくれる人材でした。もう一人がもとバスガイドや旅行代理店に勤務していて、旅行の行程表をつくることにかかなりのエネルギーを注ぐことができる人材でしたので、その後のコンシェルジュの方向性はこの二人によって決まりました。

当時、十和田のまちのレストランなどを紹介している地図として、開館当時に観光協会が美術館と協力して作ったものがあったのですが、まちのお店はかなり移動が激しい。つまり、お店がなくなっていたり、新しいお店ができたりして地図が古い。使えないのです。これは僕のなかでの常識ですが、まちの人に対して、美術館に興味をもってもらおうと思ったら、まず、美術館がまちの様々な人に興味を持つことが大切だと思っています。まちを知ることを美術

## 藤 浩志へのインタビュー

### 美術館と地域について：美術家として、館長としての視点から

(2016年3月5日)

聞き手：木村 健

館がはじめないと、まちの人と一緒に何ができるかわからない。そこで、初年度用意されていたコンシェルジュ予算で美術館周辺のまちなかのおもしろい情報とレストラン、カフェ、ショップ情報をリサーチして「とわだじかん」というマップが組み込まれた十和田を楽しむニュースレターのようなものを2013年3月から年2回を目指して発行し始めました。冬の企画で「びじゅつの学校」といういろいろな部活動を募集して展覧会を構成する地域向けのプログラムを企画し、そのなかで彼らにマチネタ部という部活を立ち上げてもらい、今もSNSやブログで公開したり、そこでの取材に基づいて「とわだじかん」を編集したりしています。3年目には奥入瀬溪流とか十和田湖までエリアを広げました。

この「とわだじかん」を作るようになって、美術館での問い合わせが徐々に減りました。最初の2年間はコンシェルジュのカウンターをカフェにして案内をしていたのですが、美術館のサイトと「とわだじかん」に交通情報も載せて、インフォメーションの人たちが交通案内もできるようにしていったら、コンシェルジュが窓口に必要ななくなってきました。

それとコンシェルジュが作っていったのがツアーです。当初はまちなかを巡るお散歩ツアーのようなものを企画していましたが、十和田奥入瀬芸術祭をきっかけとしてまずは奥入瀬、十和田湖までアーティストと行くツアーのようなものを企画するようになりました。まちなかツアーにしても、当初はコンシェルジュが美術館のサポーターと一緒に行っていましたが、そのうちサポーターを中心に行うようになりました。で、コンシェルジュは旅行代理店とツアー企画を組むようになったり、八戸の観光協会と協力してバスツアーを企画したり、じわーっと彼らの得意分野で動くようになりました。

木村：その「じわーっと」という感覚は、藤さんが嗅ぎ分けて「こっちな？」と作っていくのですか？ 藤さんはスタッフと話をする時間をどのように持つのか教えてください。

藤：日常一緒にいるなかでの自然の会話で「こういうものを作たらどうだろう」となることがあります。実は会議は嫌いで3年間ほとんど会議をしたことがありません。現場では上手な無駄話がとても重要だと思っていて、無駄話を重ねるうちになんとなく共通のベクトルが見えてきます。うちの場合、机が8つしかないんですよ。

経理も、学芸もコンシェルジュも。職員は8人以上いるので、空いてるところに座るのね。一応おおまかに席は決まっているけど、決まっていない人もいて。僕は2年間は席が決まっていたけど、非常勤になった3年目からは空いているところに座っていました。会議は今は月一でやっているけれど、最初の2年間はほとんどしてなくて。普段はみんなが一緒に会ってことがほとんどないので、そのためにシフトも変えました。うちは9時オープンの17時閉館で、朝は8時半から夕方は17時から18時までいないといけなくて、微妙に全員のシフトがずれていたのを、まとめたんです。それで休みの時間を増やした。8時半から17時半までで、残業をなるべくしないようにして。月曜は基本的に休館だからミーティングやメンテナンスをしています。

木村：コンシェルジュは他に何をしていますか？

藤：基本的には外部からの様々な問い合わせへの対応と来場者に対する全般的な案内です。同時にFacebookとかTwitterの投稿、ブログの更新などもやりながら、「とわだじかん」のネタ探しや編集作業、まちなかツアー、バスツアーなどのプランづくりなどもやっています。特に十和田奥入瀬プロジェクトが始まってから十和田湖や奥入瀬のエリアに活動領域が広がり、アーティストと一緒に奥入瀬に入るオリジナルツアーを企画していた時期はかなり大変だったと思います。今はまた新しく写真のプロジェクトをやり始めていますね。まちなかで撮った写真にハッシュタグをつけて、FacebookやTwitterにあげてもらい、飯沢耕太郎さんをゲストに迎えて賞をつけて、受賞作品をまちなかの店舗のショーウィンドウに飾っていくプロジェクトです。

木村：それは藤さんのアイデアですか？

藤：それはチーフ・キュレーターの見島やよいさん<sup>2</sup>のアイデアです。

木村：それではもうひとつ、こうして現在までをご自身で作ってこられて、その先のことについても伺います。館長として、また美術家として、十和田市現代美術館をこの先どのようにしていきたいとお考えですか？

藤：美術館の活動を面白く、魅力的にしてい

く、面白く美術活動を作る若い作家が十和田に興味を持ち、地域と深い関係を持たなければならぬと思っています。面白い作家が登場しないと美術館は面白くなりませんから。それと同じように今の感覚を企画にできるキュレーターやコーディネーターが地域の中に育たなければなりません。赴任して最初の年に講師として東北芸術工科大学の宮島達男さんや、地元の写真家やネイチャーガイドの方をお招きしつつ、若いアーティストを全国募集して、奥入瀬にある廃墟のホテルや遊休地などをめぐり様々な企画会議を行う合宿形式のアーティストキャンプを企画しました。そのときから星野リゾート奥入瀬溪流ホテルは全面的に協力してくれました。次の年にもまたアーティストキャンプをしてキュレーターとアーティストを育てようとしたときに、これって美術大学みたいだなと気付いたんです。

美術館は教育普及の延長で、作家にせよ、キュレーターにせよ、鑑賞者にせよ、とにかく人を育てていかないと面白くなりません。その発想から展覧会として「びじゅつの学校」という企画を行ったり、去年と一昨年で当時AIT（特定非営利活動法人 アーツインシアティヴトウキョウ）にいらした小澤慶介さんを十和田にお招きして、キュレーター講座をやりつつ展覧会をつくる企画を行ったりしました。

実はうちの美術館にはキュレーターが少ないのです。決まった額の管理費で多くのスタッフを雇えないし、国内外の展覧会などリサーチしたり研究したりする時間も予算もない。悲しい現実です。それを埋めるために、展覧会予算でゲストキュレーターをお呼びして展覧会を作るスタイルができたのだと思います。「十和田奥入瀬芸術祭」では当時国際芸術センター青森・ACACの服部浩之さんと、AITの小澤さんに頼みました。その時から小澤さんとの縁が始まっています。

よく考えてみると青森には美大はないし、岩手、宮城、福島にもない。山形には東北芸術工科大学があるのですが、公立の美術大学となると東北、北海道地域にはありませんでした。そんな中でようやく2年前に秋田県に秋田公立美術大学ができて、今はそこと連携した活動に興味を持っています。一方で地域とまちづくりと芸術祭とアートプロジェクトなど、いろいろ俯瞰したときにやっぱり強いのは金沢、愛知、京都、もちろん東京も。美大があるってすごい強いし、

京都と金沢は地域の産業と結びついている。これは圧倒的です。「あいちトリエンナーレ」が成功しているのも、愛知には美大があるしね。

木村：なぜ美大があると強いかというと、キュレーションをする側にも作家の側にも周囲にその卵の人たちがいて、美大で教える側にもいろんな人がいるということでしょうか。

藤：あとは日常的にサポーターがいるし、アートに関心を持つ人が多いからですね。一緒に作っていただける人がいる。まちなかに美術と関わってきた経験を持つ人が蓄積されているということだと思います。一緒に作っていただける人がいないと面白くないですね。それと何かが始まる予感のようなもの、出来上がったものを持ってきて楽しむのではなく、何かエネルギーが集まってきてそこから何かゴウゴウと発生する状況には、完成された人ではなく、未完成で意味不明の、柔らかい感性のなんでもない人が触媒となる必要があると思うんです。美大にはそんな人が多いのかな。

僕には学校化する美術館というイメージがありました。学校といっても僕の学校には授業がないし先生もいないんです。いろいろな部活動があり、部室のような状況がある空間です。実は十和田市現代美術館は冬の期間、来場者がぐっと減るんです。そういうときに観光客が来ないのなら、せめて地元の人たちに美術館を使ってもらおうと思って、部活動に注目しました。部活動はやらされているというよりも、自分たちがやりたいからやっているじゃないですか。会費を払ってまで、それが重要です。

十和田市現代美術館で最初に部活動を作ったのは奈良美智さんの展覧会の時です。美術館の企画展示ではもちろん美術館の展示室での展覧会も行うのですが、まちなかの空き店舗などでの展示もやっています。奈良さんの場合はセキュリティの問題からまちなかに作品を置くわけにいかないし、弘前でも数年前にまじゅうで相当いろんなことを行っていたので、そういうことをやってもなあ、と。それでスクール事業みたいなことをやりたいという話が出てきたので、部活の話は僕がして、奈良美智が部長の美術部ができました。で、「奈良美智が美術館で美術部を作るぞ、やる気のある部員よ、来

い！」と部員を募集したら全国から150人の応募があり、書類審査で6人に絞って、「青い森の小さな美術部」ができました。これが今も活動していて、僕は一応顧問です。この時にまちなかで空き店舗などを活用して展覧会をしましたね。

そのあと「びじゅつの学校」という企画展で、もっといろんな部活を募集しようということでエントリーシートを用意して3名以上いれば部活として申請できるというのをやりました。藤森八十郎さんという架空の学長が認めれば、部員として部活として認められて美術館の中に部室がもらえるという設定にしたのです。展示したい人もいればワークショップをやりたい人もいて、それで30ぐらいの部活ができて、自主的にいろいろな活動が始まりました。「途中でやめる」というブランドを作っている山下陽光さんが部長の被服部という部活とか、下道基行さんが部長の観察部、山本修路さんが部長の樹木部、戊井昭人さんが部長のものごと部、このあたりはゲストですが、ゲストの活動に刺激を受けていろいろな特技や思考を持った人が部活を作り出し、美術館の活動の周辺で自主的に活動を展開しました。

木村：普段、心のなかであたためていることを出し合って、一緒に景色を作る、ということですね。

藤：そうそう。十和田奥入瀬芸術祭の時にこの第二弾の部活をやろうと思ったんだけど、美術館の中にスペースを用意できなかったのです。するとシューンと活動が縮小してしまいました。やはり部室の魅力が大きかったのだと思います。自分の活動が展示されているコーナーであれば人は集まってくるし、誰か自分の興味関心を共有できる人がいるかもしれないという期待感が人を集めるけれど、その拠点を作れなかったのです。

木村：活動の香りがほんのり残っていると、部室の性格があると人が来るのですね。いつのまにか残っているものが貯まっていつか、しみ出てくるものがそこにあったりとか。

藤：そうですね。そういうものがないと自分たちの場として感じられないですね。「びじゅつの学校」はそんなコーナーを少しでも作っていったんです。そういう場があると「ここだ」という認識があるから、ちょこちょこ関わったり、



1



2



3

1 十和田市現代美術館「超訳びじゅつの学校」での部活動「Umajin部」の様子(2013年)

The situation of the club activity, *Umajin-bu* in the Super Liberal Art School, Towada Art Center, 2013.

2 十和田市現代美術館「超訳びじゅつの学校」での部活動「花かざり部」の様子(2013年)

The situation of the club activity, *Hanazakari-bu* in the Super Liberal Art School, Towada Art Center, 2013.

3 「水と土の芸術祭」での部活動「手部」の様子(2012年)

The situation of the club activity, *Te-bu* in the Water and Land Niigata Art Festival, 2012.

画像提供：藤 浩志

Courtesy: FUJII Hiroshi

\*1 藤は十和田市現代美術館館長に2014年4月に就任し、インタビュー後の2016年3月末に退任した。

\*2 児島やよい氏は2016年4月より十和田市現代美術館副館長に就任。

やろうかという意識になる。

木村：公共の場所だと、そうしたことはなかなか残しにくいことかもしれませんね。

藤：部活を作る活動は長野県茅野市の美術館でやったり、新潟や北九州、前橋でもやったのですが、今いろいろとすごいことになっているのが新潟の「手部」です。商店街の空き店舗にアートセンター的な空間があったのですが、そこを手部の部室として解放したら、そこからいろいろな活動が発生して面白いことになっています。それは新潟が場所をちゃんと作れたってことだと思うのです。

木村：「手部」の主体は市ですか？

藤：場を提供しているのは新潟市ですが、手部はまったく任意の集まり。立ち上げのきっかけは新潟市の事業だけど、その主体は市民です。その部室は商店街の中で、市が借り上げて商店街の活性化のために開放している場所だったのですが、手部の部室として商店街が提供しているようです。そこに集まってくる人がじわじわと増えて、そこから活動がまたじわじわと展開して。実は要は部長の人柄だったりするのですよね。手部も日常の仕事が終わったら必ず部室を開けにくる部長の女性が一生懸命で、いい味を出している。

十和田では大友良英さんが部長の音楽部も作りました。そして奈良さんの美術部とで、六本木アートナイトに対抗して三本木ナイトというイベントができて盆踊りをしました。実は捉え方によっては美術館が仕込んだイベントとそれを作るためのワークショップなのですね。それを「部活です」といい、部員を募集して、地元出身のミュージシャン桜田マコトさんに副部長になってもらって、その人が仕切って練習するのだけれど、本当にいろんな人が集まって練習を重ねて、まるで部活動。それに奈良さん部長、中崎透副部長の美術部が盆踊りの飾りつけを作っていくのを、みんな本当に一生懸命に楽しそうに行うんです。妙な言い方になりますが、部員たちは仕込みも片付けも自分でやるのが当たり前だと思っている。美術館が主体となってイベントやワークショップとしてこれをやっちゃうと、参加者もゲストもお客様みたいな気分になって取り組んでくれるんだけど、そこが

部活の力というか、自覚が違うんですね。部費として会費を払うのと参加費を美術館に払うのと、気分が違うじゃないですか。

このときは期間限定でしたが、美術館の一部を美術部の部室、音楽部の部室という感じで開放しました。そこにもうちょっと溜まり込めるような、部室的なしつらえができればよかったのですが、イベント重視みたいなかたちになったのは反省点です。ただ期間限定っていうのもありだなとは思いました。部活は最初に市民に対して広く告知していますし、つねに部員を募集しているので公平性も担保されています。それでいながら外からの見え方も変わりますし、何と言っても参加者のモチベーションが全然違ってくるのはおもしろいですね。

木村：部活だと部長もいれば、会計みたいな人が内側にいますよね。それを美術館がやるのではなく、お金の管理も自分たちで行うのですか？

藤：そこまでじゃないね。部活の体をした、美術館のワークショップというか。

木村：外に開く部分では、例えばチラシは部員たちで作りましたか？

藤：それも美術館が仕込みましたね。いま美術部に関しても完全に独立して自分たちで活動して、北海道や秋田で展示したり、奈良さんもたまに来たりとか。十和田の美術館を離れていて、それはそれで面白いと思います。

木村：離れるまでは2年間かかりましたか？

藤：2年間です。まちなかにいくつか拠点を作っていこうとしていて、そこをどういうふうネットワークしていこうかというのは今やっているけど、まだちゃんとできてないところはあります。唯一それらを繋いでいるのはマップとツアーですね。

木村：それは藤さんではなく、コンシェルジュが繋いでいるのですか。

藤：そうですね。今、十和田ではないのですが、福島県いわき市のいわき芸術文化交流館(いわきアリオス)で面白いことを仕掛け始めています。いわきってすごい広域なんです。いろいろ

と多様な性格を持った地域が、昭和の大合併のときに合併していわき市となったところ。もちろん震災や放射能汚染で大変な地域もあるのですが、基本的に市内の中心部は、復興のために人が入って空き家がないぐらい変化しつつあるところ。その文化施設の職員が自分の興味関心を核にしてリサーチを行い、地域の様々な文化の種を探しつつ、部活動のようなものを作り出す「スキマチイワキ」という新しいタイプのアウトリーチの活動を行っています。ローカル線好きがローカル線の駅舎をリサーチしてみたり、各地のお雑煮をリサーチしてみたり、和菓子、発酵物、<sup>あざな</sup>字名、こけし、ローカルバスなど、地域の様々な心惹かれる要素に興味と関心を注ぐリサーチ活動です。

十和田のコンシェルジュの発想もそうだったのですが、地域の人に施設の活動に対して興味を持ってもらう以前に、まず施設側が地域の人たちの様々な活動に興味関心を持ち、対話を始めるところからでないとなんだか面白くない。地域には様々な魅力的な活動が、あるいは表現の種が潜伏しているのです。それをコンシェルジュや施設の職員など、施設で働いている人たちが主体となって積極的に掘り起こそうとする態度が地域に対していい刺激になって、結果として施設の活動に繋がっていくのだと思っています。

---

藤 浩志(ふじひろし)

美術家。1960年生まれ。京都市立芸術大学在学中演劇活動に没頭した後、地域社会を舞台とした表現活動を志向し京都情報社を設立。同大学院修了後、青年海外協力隊員としてバブアニューギニア国立芸術学校勤務。都市計画事務所勤務を経て1992年に藤浩志企画制作室を設立。各地で地域資源・適正技術・協力関係による対話と社会実験を活用した表現活動を志向する。NPO法人プラスアーツ副理事長(2016年-)、十和田市現代美術館館長(2014-16年)、秋田公立美術大学教授(2014年-)。

---

木村 健(きむらたけし)

金沢21世紀美術館 エデュケーター。1972年生まれ。岡山大学大学院修士課程修了(美術史)。1997年開館の子供向け体験型博物館施設「キッズプラザ大阪」でサイエンスとアートの要素を組み合わせたワークショップを企画するとともに、神戸市のNPO「C.A.P.」に参加するなど地域交流型のアート活動に関わる。2000年より金沢市現代美術館建設事務局に勤務、金沢21世紀美術館開館後は教育普及プログラム担当としてキッズスタジオを中心とした子供を対象とする活動、学校連携活動等に携わる。

# インタビューを終えて 藤浩志の現在を通して見る、金沢21世紀美術館とまちの未来像

木村 健

美術家としての藤浩志が表現活動のために「藤浩志企画制作室」を設立したのは1992年のことである。これについて彼から以前、藤浩志企画制作室とは「藤浩志」を企画し制作するものだ」と説明を受けたことがある。その後も現在まで彼はまさに美術家・藤浩志を社会に活かし、地域社会を舞台に協力関係や適正技術を見極めて新たなイメージを導き出す。すなわち、社会の中に新しいOS（オペレーティング・システム）を生み出すという表現を探求してきたといえよう。時には「藤浩志」以外に新たな役割を担う登場人物として、彫刻家・楠文や架空の学校長・藤森八十郎などを生み出しつつ、常にコミュニティの中での個々の人格とその場の役割とが活かし合うような場作りを続けている。

藤はOS作りという表現の中で、時に個人の生活での細かなシーンに着目し、それらが日々の積み重ねのなかで無意識に生み出している巨大なものを可視化するような提案を実践してきた。例えば、1997年に家族のプロジェクトとしてはじめた「家庭内ごみゼロエミッション」で藤は家庭生活から排出されるごみの全てをコレクションしたが、それは家族や町内のような小さなコミュニティの中で動きはじめながら、やがて都市や国も超える大きなネットワークとして広がっていった。集積した膨大な樹脂製品は展覧会「Vinyl Plastics Collection」（1999年、箱根の森美術館）で再生し、そのサイクルは地域活動のためのOS「Vinyl Plastics Connection」（1999-2003年）へと発展するのだが、現在では日本各地を始め海外でも行われている「かえっこバザール」もこの「Vinyl Plastics Connection」の活動上で生まれたもので、その原型は当時、小学1年生と保育園児だった2人の藤の娘たちによる発案である。ここでも子どもたち同士のコミュニケーションやグループ内の役割作りの仕組みが集合し、地域のより大きなコミュニティに

も活きるシステムが生まれている。

さて、藤がそのように「地域のシステム」に立脚した活動を広げると時期を同じくして開館の準備を進めていた金沢21世紀美術館では、プレ・イベントの段階から藤に着目している。2002年3月には児童館を会場に、子供が自主的に参加する場を作る美術館像を示すものとして「かえっこバザール」プロジェクトを行った。（会場：金沢市立城北児童館）<sup>\*1</sup>。ここではまず活動のコアになる子どもたちと大人のメンバーを募集して事前にアイデアを持ち寄ってショップやゲームの仕組みを作り、当日は多くの子どもたちを迎えて共に楽しんだ。以降も当館では、折にふれ「かえっこバザール」を実施し、現在は各地の「かえっこ」のプロセスで集積したおもちゃから成る作品《Happy Paradies（ハッピーパラダイズ）》を、藤の社会との関係性を示す重要な作品として収蔵している。そして今あらためて金沢21世紀美術館の今後について地域における機能をどのように示していくかを考えるにあたり、藤浩志の活動と地域社会の関係の捉え方をアップデートしておくことは重要であると考えた。

また、2016年にこのインタビューを行った背景には、当館で2014年度より始まったグループ活動「まるびい みらいカフェ」の存在がある。これは美術館での「ワクワク・ドキドキ」を実現するためにメンバーが自主企画・自主活動を行うもので、会全体でのミーティングと話題ごとの小グループの集まりを織り交ぜ、館内案内のほか造形や短歌のプログラム、まちなかの路地探検を行うなど、美術館に集う人々がより楽しめる活動を目指している。これらの活動とともに美術館とまちのこれからの関係を考えるためにも藤浩志の最新の活動に着目したのがこのインタビューであり、招聘の際には当館主催の「2015年度ボランティア交流会」（2016年3月5日）でも藤のトークを行い部活動の様子などを紹介して

もらった<sup>\*2</sup>。

今回の藤の話の中で特に興味深い点は、部活動的な居場所の在り方と施設側の地域への働きかけ方であり、集う部員にやることへの強いモチベーションがあって部活が成り立っていることだ。同時に施設側にも地域への興味関心を持ち働きかけることの重要性を感じた。同様に、コンシェルジュと来場者の関係においても、自分自身のモチベーションと互いへの関心が鍵といえるだろう。今回のインタビューでも、自主的な活動のなかで社会的な繋がりが生まれる場面では、どれくらい施設側のスタッフが働きかけるか、どんなツールを提案するか、そこには常に藤の観察・提案と集う人々の試行錯誤があった。すなわち、施設の機能が一方的に人を待ち受ける箱であるだけでは、やはりそこから生まれる人の動きや広がりにも限界があるようだ。美術館とまちの人との関係においても、互いが互いに惹かれ、刺激を与え合うとともに変化すること、そしてそこから新しいものが生まれることを導けるよう務めていきたい。

\*1 詳細は以下を参照。『2001年度 金沢21世紀美術館（仮称）活動記録集』（2002年、金沢21世紀美術館建設事務局）。また、その後金沢の市民グループ「金沢エコライフくらぶ」を中心に「かえっこバザール」が継続的に市内で開催されている。

\*2 トークの内容は「みらいカフェだより Vol.2」（2017年3月発行）に抄録。